



タイトル：大森康正 イラスト：瀬尾理

会員リレーエッセイ

「スカパー熱乱高下譚」

東京大学生産技術研究所 高島正典

勉強の秋に、やはり英語は耳から学ばねばと言いついて、9月の月上旬に、スカパーフェクトV（スカパー）に加入しました。パラボラアンテナの取り付け、配線を済ますと、カタログから契約するチャンネルを選び始めました。英語の勉強にCNN、BBC、Foxの英米系のニュースは外せない、洋画や海外ドラマもカジュアルな英語表現を知るには必須だろう、幅広い教養を培うためには、ディスカバリー・チャンネルをはじめ、エデュテートメント系も捨てがたい、なに、この辺のチャンネルはパックでお安くなるのか、などとまんまと乗せられて、契約リストはどんどん膨れ上がっていったのでした。なお飽き足らず、カタログをぺらぺらめくっていくと、『「安全と危機管理」をとことん追求する日本で唯一のCS放送局、ピースチャンネル』という文句が目にとまりました。防災にかかわる研究をしている者ならば、こういうものにも目を配らねば。これも契約リストに加わりました。

10月に入り肌寒くなると、はじめの熱狂からのリバウンドもあり、私のスカパー熱も一気に下がりました。1日は24時間であり、平日に家でまともにTVを見ている時間なんて実質1時間もないことに気づくのでした。この時、真っ先に契約解除リスト入りすることになったのが、残念ながらピースチャンネルでした。防災や危機管理に関する情報をエデュテートメント形式でバンバン流してくれるのかと勝手な想像をしていたのですが、少なくとも私が家に帰ってTVをつける時間帯には、自衛隊の活動の紹介や、なぜか[モーニング娘。]のプロモーションビデオしかやっていてくれなかったのです。9月26日の十勝沖地震の後にも特集を見ることはありませんでした。解約手続きをとって数日後、ピースチャンネルから「ご契約のお礼」と共に[モーニング娘。]の集合写真が印刷された500円分のQuoカードが届きました。やはりこのチャンネルとは縁がなかったと思いつつ、いつか防災・危機管理で、エデュテートメントを成立させてみたいものだったのでは。

(ペンを名古屋大学災害対策室の木村玲欧さんにまわします)

## 三宅村復興計画 ～計画の策定とその後の展開～

池田 匡隆 氏（三宅村復興計画担当課長）  
佐久間達巳 氏（三宅村村議会議員）



（池田）今日は、絵で見る三宅村の復興計画という形で、噴火前から噴火の間の様子まで、写真などを見ながらお話させていただきます。

まず三宅島の概要ですが、距離は東京から約180km、面積が55.5km<sup>2</sup>、周囲が38.3kmで、東京の山手線の内側ぐらいの大きさです。雄山の標高は、噴火前は814m、現在は約700mです。噴火前の人口は約3800人（約1800世帯）、現時点で3356人（約1700世帯）です。ピークは昭和30年で、7100人ぐらい居たそうです。

観光客数は約8万人です。夏の7～8月がピークで、平均宿泊数が2.1泊です。三宅島の気候は温暖で雨が多いため、植物が非常によく成長します。極相林の代表のスダジイやタブノキのどんぐりや果実がたくさん実って、野鳥のよいえさとなっています。

産業は以前は一次産業が中心でしたが、現在では二次産業および三次産業にシフトしてきています。三次産業は観光が主体ですが、海外旅行が非常に手軽になってから、観光客数も減少しています。一次産業については噴火によるダメージや後継者難から、今後の見通しを非常に危惧しているところです。

### 噴火前の島の様子

三池浜ではテングサがよく取れ、世界の60%が日本で、そのうちの60%が三宅で取れます。また大路池は、約2000年前の噴火口跡に水がたまったと言われています。この周りが森になっていて、森林性の野鳥や水鳥の両方が観察できるバードウォッチングのメッカとなっています。

雄山の頂上に八丁平というところがありました。今は陥没してなくなってしまいましたが、標高が800m弱で、気候の変化が非常に激しく、空気が山に当たって一気に上がって膨張して急激に冷えて霧状になります。本州の250mクラスの植物が生息していたようなところです。

村営牧場では、昔は牛がいました。多摩の牛を預かって、種付けして育てて返すということをしていました。噴火のときに死んだ牛が骨になっていた様子が新聞に出て、とても印象深かったです。

三宅の鳥はアカコッコといいます。腹の横が赤いのです。かわいい生物のことを「コッコ」と言うので、「アカコッコ」と呼ばれ、標準和

名になっています。三宅の花はガクアジサイ、海の中ではクマノミという熱帯の魚がいます。

### 三宅島の雄山噴火

6月26日 初めて気象庁から、「三宅島で火山性地震増加、今後の活動に注意」「三宅島で噴火の恐れ、厳重に警戒」という火山情報が発令されています。

27日 三宅島の西海域で海底火山による赤色海域を確認した、という発表がありました。これまでは1～2日で噴火が収まってきたため、だれもがこれで終わりだと思っていました。

29日 「火山活動が低下、今後陸域および海面に影響を及ぼすような噴火の可能性はない」という火山予知連のコメントもあったほどです。

7月5日 三宅島測候所から「山頂部で噴気が増加して場合によっては火山灰放出の可能性がある」という発表がなされます。

8日 ついに雄山山頂から噴火しました（噴煙の高さ800m）。

10日 山頂カルデラ内に直径1000m、深さ200mの陥没を確認しています。

14日 山頂から高さ約1000mの噴火があり、この日は2回噴火がありました。14～15日の噴火で、桜島の10年分の灰が降ったとか、1億数千万m<sup>3</sup>の灰が降ったと言われていました。道路には火山灰がたまり（図1）、雨が降れば灰が固まってカチカチになり、晴れると砂ぼこりとなります。植物にもべったりと火山灰がついて、下に垂れ下がっている状態です。そういう中でも、灰の中から咲くハマユリもありました。一服の清涼剤です。

26日 雨が降り、三宅島の4か所で初めて泥流が起り、家も埋まってしまいました。

8月10日 2番目に大きな噴火がありました。



図1：平成12年7月15日の様子

18日 最大規模の噴火です(噴煙の高さ14000m、図2)。翌日、約5cmの石がばらばらと降ってきて、フロントガラスが200枚割れています。プラスチックの屋根はざらざらに穴が開いていたと聞きました。

椎取神社の鳥居が埋まっています。今では、一番上の横の木しか見えません(図3)。

平成12年8月18日17:00ごろ



図2：平成12年8月18日の様子

平成12年8月25日17:00ごろ



図3：平成12年8月25日の様子

29日 温度約30℃、時速10kmという低温火砕流が生じました。これが最終的に全島避難のきっかけになりました。

9月2～4日 全島民が避難しています。ただ、このときすでに半分から3分の1ぐらいは自主的に避難していて、島に残っていた人はかなり少なくなっていました。

## 三宅島の復興計画

三宅村では復興計画策定委員会を作りました。この委員会は島民を中心に、大学の先生3名、農協や漁協、観光協会などの経済団体の代表や自治会などで構成しています。村議も3名います。委員長は林先生にお願いをしていますが、三宅村の委員会で島外の人が委員長になったのは初めてだそうです。平成14年1月29日に第1回の委員会を行い、当初は6月までにまとめようというのが村長の意向だったのですが、今考えると無謀でした。島民も熱心な議論を行い、12月にようやくまとまりました。

復興計画の特徴は、帰島時期が不明確な中での計画だということです。いつ帰れるかわからない中で、「今すぐ取り組むべきこと」、「帰島までに行うこと」、「帰島後に行うこと」、この3つのステージに事業分類をしました。

そして、島民による手作りの計画であることです。事務局が原案を作成して、島民による委員会で検討しました。たいてい事務局が作るとしゃんしゃんといくのですが、全くそんなことはありませんでした。また島民からのアイデアを取り入れ、53名から約220のアイデアを出していただきました。

復興計画がだいたいでき上がったところで、11月頃に中間報告を行い、島民の意見を聴取しました。11名から約90の意見をいただいて、それらを反映しながら作っています。

また計画の中に、島民や各経済団体への要望を記載したのも珍しいと思います。

もう1つ、三宅島には阿古、坪田、神着、伊豆、伊ヶ谷という5か村があり、集落意識がとても強い島です。全島避難を期に、「5つの集落の島」から「1つの島」に意識改革を行いたいと考えて、三宅島のアイデンティティーを確立したいことを島民に要望し、各経済団体には経済感覚や経営感覚を身につけてほしいことを記載しています。なかなか一朝一夕でうまくいくことではないですが、これをお願いしています。

基本理念として「生活再建」「地域振興」「防災しまづくり」という復興の3本柱がお互いに関連し合いながら、島ぐるみで一体的に地域運営システムを形成して「三宅島が人と自然にやさしい健康で豊かな村」、こういった災害復興の花を咲かせることを構想しています。

「生活再建」というのは、「避難生活対策」から「就労対策」「学校教育」「住宅再建」「保健・福祉・医療の充実」「その他」からなっています。目標を島民約3800人の帰島としてい

ます。このように、数字目標を掲げながら施策を組み立てていこうというのが1つの特徴とと思っています。

「地域振興」は観光を主軸にして、「農業」「商業」「漁業」「林業」「その他」、こういうものが連携しながら振興を図っていく。観光人口年間12万人を目標に、「エコツーリズム」と「ホスピタリティ」をキーワードとして自然体験、目的型観光に対応した滞在型観光地を目指していきたいところです。

「防災しまづくり」については「インフラ」「交通施設」「エネルギー施設」「防災施設」などからなっています。犠牲者ゼロの安全で安心な島を謳っています。観光客に対しても最大限の安全を確保していきます。

三宅島の復興の第一歩は、総合産業としての観光産業を核として地域振興を図るとというのが一番よいだろうと考えています。そうした経済活動、産業活動を支えるため、いざというときの避難体制の確保や質の高い社会基盤の整備などを行う防災しまづくりを次に進めていかなければならない。この取り組みによって得た収入で生活再建を図り、基本的な構想で定めた、人と自然にやさしい健康で豊かな村を実現する。このような形で三宅島の復興を進めていきたいと考えています。

基本計画は目標年次を10年間と定めています。将来人口が5150人（定住人口3800人、交流人口1350人）とし、定住人口は噴火前と同じ数字です。交流人口は観光人口が主ですが、年間12万人が3泊4日を成し遂げるとして計算しています。

財源確保の方策が非常に問題となったところですが、村の経済を活性化させて村税を増収、先進的な事業をモデル事業に、公共事業の継続的・持続的な事業化の要望、復興基金や特別立法、エコマネーの検討などを挙げています。どれ1つ取っても実現することが難しいので、今苦労しているところです。

今後の課題は、数値目標を設定することです。そこで、事業費の算出と優先順位を決定していきましょう、社会情勢の変化に合わせて順次見直していきましょうということです。

## 三宅島の現状

三宅島が今どうなっているかという話をさせていただきます。

まず災害復旧事業として、砂防、道路といったものの復旧が中心に行われています。水道、電気、通信も入っています。

そのほか、実施計画の策定は私の課でやって

いますが、数値目標を設定しながら年度別の事業計画を作っていくというものです。これは先ほどの委員会で復興計画を作り、それを受けて第4次三宅村総合計画を作っています。実施計画になっていくと、お金の縛られてなかなか満足いくものがないのが残念です。

ちなみに村の総予算は、今年は46億円です。そのうち建設費が約20～25億円。復興計画に取り上げたものを全て行くと1300～1500億円ぐらいかかってしまうのです。今の予算でそれをやっていくと、65～75年の時間が必要になってきます。林先生のご指導により、いいものを作っていただいたのですが、実現するのが難しく、本当に苦労しているところです。

そのほかにも、ガス検討会の報告が平成15年3月24日に出されています。まず、ガスがある中でも帰島するためには、環境基準に達しなくてもガス検討会で出した目安をクリアしなければならないこと。そして行政は、安全対策を実施すること。さらにガスによって島民はどのようなリスクがあるのかをきちんと説明（リスクコミュニケーション）することの3点が報告されました。

これらを行った上で島民の合意形成を図り、帰島するならこの手順を進めてくださいということが書いてあります。今、島の中では安全対策の検討とリスクコミュニケーションをしている状況です。リスクコミュニケーションについては、延べ1200人ぐらいを対象に行いました。40～45回ぐらい、土・日曜日、夜も島に行ってまでやっています。

火山ガスの量は、SO<sub>2</sub>換算で1日当たり3千～1万t程度の量が出ています。噴火予知連から、平成14年8月から横ばいだと言われてい

ます。火山ガスの現状を赤、黄、青で地図上に示している（図4）ののですが、赤の地域に住んでいる人は約300人です。人口が約3400人という

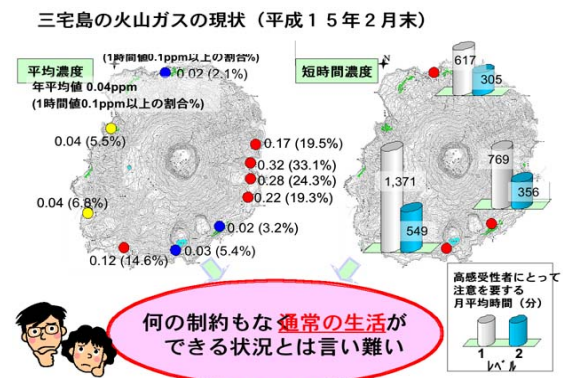


図4：三宅島の火山ガスの現状

と、90%以上の人が青の地域に住める状況になるので、この2つの黄が青になれば帰島しようかと村の中では考えています。まだ東京都や国との調整が終わっていませんので何とも言えません、そうなるといいなと思っています。

島の復興という面で、離島振興法があります。島の復興は、この補助がなければできない。法律によると、これまでは後進性の排除、国土の均衡ある発展ということが振興の目的でした。ところが平成14年7月に改正され、①離島の地理的・自然的特性を生かした振興を目的に据えていきなさい、となりました。まさに三宅島の地域振興とは、こういうものかなと思います。そして②創意工夫による離島地域の自律的発展の促進、です。

### 三宅島の復興の4つのポイント

三宅島の復興のポイントは、「独自の文化と自然」「自然体験型観光」「学術研究としてのフィールド」「火山との共生」と思っています。

「独自の文化と自然」とは、他の島にはない独自の文化や自然、その島でなければ味わえない料理、体験活動、伝統、島民とのふれ合い、といったことです。そして何よりもその島の自然そのものを満喫できること。これが島の復興の大きな柱ではないか。三宅村は噴火がたびたびありましたので、大規模開発にさらされていません。伊豆七島の中では自然が残っているほうで、三宅島では自然環境が温存されてきていると思います。

「自然体験型観光」とは、離島ブーム以降、釣り、バードウォッチング、ダイビングのようなものがはやってきています。三宅島では自然資源に経済的価値があると実感している人も多ようです。来島する観光客のリピーター率も高く、三宅島民になった人もいます。そういう人は来島回数が増すごとに島民とも親密度が増して、知識欲も旺盛になり、島のことをいかに知っているかがステータスになっているのです。これも復興の柱だと思います。

「学術研究としてのフィールド」としては、島には特異で独自性の高い自然と生物相があります。多くの研究者が訪れ、島民にその知識が波及していることがあります。この研究者が来てくれるということも復興の1つの柱だと思います。それは三宅島民にとって自慢であり、誇りになっていく。島の貴重な自然環境を保持していこうとする意識改革にもつながると思います。

最後に「火山との共生」です。三宅島の自然の魅力は火山の賜物です。自然の生態系という

のはどんな火山活動にあっても再生し進化して対応してきました。島民も生活や産業を再生し進化させて復興することが、三宅島の一番の魅力・価値につながっていくのではないかと思います。



（佐久間） 池田課長に続き重複しますが、復興計画の内容と今後についてお話をさせていただきます。

私は今回の復興計画は、三宅にとって非常に大きなメリットがあったという気がします。

それは、委員を広く外部から投入したことです。今までは島民から選ばれた人と、外部から来るのは東京都の役人と、島に就航している飛行機と船の会社から1人出向してくる程度でした。3千万円ぐらいかけても、ほとんど「大島」「八丈島」の名前を「三宅島」に変えた画一的な計画が提案され、夢をたくさん書いて「これをやれば三宅は将来1万人になりますよ」といったものにずっと乗ってきたのです。しかし今回は林先生の旅費と弁当代だけで、現実にかなり即応した、住民の意向を取り入れたものができたと思っています。

以前、島民の集まりで偉い人の多くが「三宅の人はかわいそうだ。生活は苦しいでしょうが、行政からいろいろな補助を受けて、帰れるまで頑張りましょう」と言った中で、唯一「島の人は自立しろ。まず自分たちで助け合わなくてどうするのだ」と言ったのが林先生だったのです。こういう人を委員長に据えて始めた委員会でしたが、最後には全員が林先生に感謝を申し上げたということで、このプロジェクトはやってよかったと思っています。

そして島民からアイデアを募ったことです。もちろん島民以外からも募集しました。中間報告をして最終のものを示すという林先生のプログラムどおりに、ほぼ進みました。唯一進ま

なかったのは日程だけです。文字にしたものを実現するのは非常に難しいと池田課長からありましたが、私も不可能に近いという気がしています。ただ、林先生に「途中で目標を数値にして、繰り返し目標に達したかどうかの確認作業をしよう」と言われたのです。これは今までやったことがなく、非常にいいことだと思います。最終的に12月に村長に答申が出されたのですが、今年の暮れの議会にはより具体的な実施計画が出てくると思います。

火山ガス検討会の報告では、健康リスクを全国の環境基準よりも緩和していますが、健康被害がないと断言はできない。要するにリスクを負ってでも帰ろうという気持ちがなければ帰れない、と示されています。これが復興計画の策定前に示されていれば、この計画はまた違って来たのかもしれませんが。これは島民が帰るための最低限の条件です。観光を主体とした島の活性化、本来の目的である観光客の誘致については、この中にはないのです。では、観光客にこのリスクを負わせられるかという別の問題で、計画を実施に移すには相当長い期間が必要なのではという気がします。

サイクルが狂ってくるとどんどん人口が減っていく。地域の在り方をどうするかということが論じられるのですが、計画を作っても半年で色あせてくるかもしれません。当初、三宅村のコミュニティーは残して、現場が三宅島でなくてもいいのではないかと議論がありましたが、結局、何とか三宅島で頑張りたいという声に集約され「厳しいけれど取り組んでみよう」となったのです。島の各地区の自治会長さんを集めて、林先生がわかりやすい言葉で1つ1つ伝えてくれました。

「火山との共生」は、帰島の条件が非常に厳しく制約されるため、これから計画の中でまだ着手しない前に変更しなければならないという気がします。税収が1割に満たない島で生きるのは大変で、その上、火山との共生は非常に難しいという反面、これをウリにすればかなりいけるのでは、という話もありました。

ここで説明した内容は、出来上がった成案で、会議の中ではいろいろな意見が飛び交ったのです。林先生は島を三宅村に売って債権者になり、三宅村を会社にしたらどうかと。私は非常にいいことだと思います。このようにいろいろな意見をいただいて、1つでもやってみることが重要だと思います。

ちなみに私は商工会の青年部に入っているのですが、やはり若い世代が動かないと無理だと思うのです。できるかできないか、やってみ

ようではないかと下から盛り上がるのが大事だと思います。

一方、田舎だからトップダウンというのも必要なのです。恐らく委員のほとんどに「あの林を潰してやろう」という思いがあったと思うのですが、いつの間にか林先生のペースになって、「いろいろ意見を言ってくれて面白いではないか」と変わっていきました。島の人にとって、いいことだと思います。

最終的には財源問題に尽きると思います。いかにしてお金を稼ぐのか。これも林先生の提案ですが、興味のある人に噴火のガスが出ているところを体験してもらってツアーを組んで、それを村の財源にしたらどうかというのです。東京都はうんと言わなかったですし、私も現実性はないと思いましたが、こういう発想をしてでも財源を稼がないといけないことを身にしみさせることが必要なのです。その点では非常にいい人に巡り会えたと思っています。

このほかの提案をご紹介します。

東京都23区のごみを三宅島に一手に入れて、火山の影響しない領土を広げていこう。三宅は2000mの空港がなく、プロペラ機しか使用できませんし、避難場所としても更地が欲しいところです。また、刑務所を三宅島に誘致すれば500人島民が増えるのではないかと。今までまじめに働いてくさやを作り、民宿の1日2000円ぐらいの日当で小金を貯めていたおばちゃんまでもが、売れるものは売ってしまおうという考え方になります。

昭和58年の噴火のときは400世帯が埋まり、私の家もその1つでした。私は近くに安全な土地を求めて家を再建したのです。しかし、昭和15年、37年、58年の噴火と違って、今回は島民全員が被災者なのです。前回までは特定の地域だけだった。全員が島に帰って生活するには、お金が必要だということがわかってきたのです。しかしそのお金もなかなか出ないということもわかってきたのです。そこで島の人の根気強さを何とか反映させたいと思うのですが、先は厳しいという気がします。

機会があれば、個人的にでも林先生に「その後」の報告をさせていただきたいと思いますが、東京都から派遣されている池田課長がいつまで三宅にいてくれるのかとか、いろいろあるのです。

とにかく人材だと思います。多くの人と巡り会って、多くの意見を聴取することが井の中の蛙である離島として生きるには、一番必要なことだと思います。

(文責 青野)

## 熊野古道アクションプログラムの作り方

平野 昌氏

(三重県地域振興部東紀州活性化・地域振興プロジェクトグループ主幹)

山本 康史氏(ハローボランティア・ネットワークみえ代表)

前田 憲司氏(フリーライター)



(平野) お手元に「熊野古道アクションプログラム」のよく似た冊子が2点とリーフレットが一つです。今日私が言いたいのは、スキルを持った人がやる気を出せば、みんながその責任の分野で頑張ればいいものができるということです。

### 熊野古道を世界遺産にエントリーする

実は世界遺産というのは3県合同でやっております。要は、紀伊半島の突端の部分全部一つの世界遺産ゾーンとして考えて取り組んでいるのです。和歌山から見ても三重県から見ても、ここは非常に過疎です。過疎対策という意味で今まで三重県はどんどんお金を投下していたのですが、なかなかうまくいっていませんでした。奈良県もそうです。そういった高齢化、過疎を控えているところで、それが幸いして世界遺産になる予定です。来年6月にそれが決まるのですが、人がいないところが自然が残されるチャンスが多かったということが幸いして世界遺産にエントリーしているということです。

阪神淡路以降の8年間に私が学ばせていただいたのは、プロセスの共有をしないと計画は実行されないということでしたので、関係者とプロセスを共有したいということで計画作りをスタートしました。もともと世界遺産ですので、それを守ることが前提ですが、それをどのように地域に生かしていくかということで保全と活用をどういった形で具体化するかということ土台として作りました。ただ、みんなで自発的にやっていかないとだめだということで計画作りを始めました。

三重県は世界遺産の中では熊野古道という道しかないと考えていただいていると思います。ほかの地域は、高野山、吉野山、熊野三山という拠点施設があるのですが、三重県はそこに至る道だけなのです。「熊野古道」というのは1000年ぐらい前からの国道で、ずっと林道として使われていたりしたのですが、埋もれていたりして、それを地元の人がこの5~6年前から発掘しました。それは世界遺産になるためにやっていたのではなくて、自分たちのところ

でもいいものがあるということで、ごく一部の方が掘り返してやっていたのです。石畳というのは今のアスファルトのようなものですが、崩落しないように固めてありました。足のステップに合わせて作ってあったりして、非常に考えてあります。周りはヒノキの森林です。

### 行政主体ではない取り組みを目指して

今日はどのようなプログラムになっているか、あるいはどう作ったかということに重点を置いて話をしたいと思います。

アクションプログラムという実行計画ですが、熊野古道が将来にわたってどのようにその地域にとって価値を伝えていくかということです。とりあえず世界遺産登録までの3年間で第1期としよう。あまり長期的なタームで物を考えないほうがいいと思いますし、とりあえず3年ぐらいだったら予想ができるだろうと思いました。

これをどのように運営するかというと、行政だけではなくて、関係者がみんな一緒になって運営しよう、協働会議を作ろうということで今計画されています。実は私がこういう仕事をやらせていただいたときに最初に行った白神山地の中で聞いた言葉が非常に気になったのです。地元のブナ林の保存会の方が、あれよあれよという間に自分たちのブナ林が世界遺産になったけれども、自分たちの意見は全然聞いってもらえないと言うのです。県と国でやっている、なぜあんなっているのだろうという話を聞きました。やはり住民の方も一緒になってやるべきだと思いますので、そういった意味で、同じテーブルにみんなでつこうということでこのようなものを考えました。

行政が勝手に考えたものではありません。ワ

ークショップの構成員が3種類あります。「市民プランナー」といって公募で集まった方、これはチラシや広報で手を挙げていただきました。そのプランナーが約60名集まりました。地元の方が中心でしたが、広くいろいろなところから参加いただいています。「行政職員」はやはり関係者として欠かせませんので、こちらのほうにもご案内しました。そのときに、村の組織決定はないけれども、私の意見として言わせてほしいという立場で言っていたいております。あと「サポーター」という存在を入れました。これは東紀州地域以外の市民活動や、いろいろな事業をしていて成功体験を持っている方を10人、目的的にかき回していただくためにこちらで選定していきました。

そういった方を合わせてこのワークショップは100名を超えたのですが、その集団で運営させていただきました。そこに外部からアドバイザーとして各専門家の方に入っていたいたり、いろいろな調査をしたり、あるいは報告書等の文献の整理をしました。専門家、一般の方に、こちらから飛び込んでいってお話を聞かせていただくというスタンスで考えました。大きなワークショップは4回ありましたが、ヒアリングなども含めまして、相当の機会現地に入ってやりました。

最後の5回目に原案説明ということでやりましたが、これについてもワークショップのメンバーが承知しないと次に進まないということでやらせていただきました。私は県の職員ですから、うちの部長あるいは知事に認めていただかないといけないのですが、「今のところはこうです」とは言えますが、「こうなるのか」と言われたら、「それはわかりません」と答えているのです。つまり住民の方が同意しないと進めませんし、進ませるつもりはないのです。最後に住民の方がうんと言ってくれた案を持って県庁内のオーソライズに入りました。

世界遺産というのは条約で決まっているものです。熊野古道は文化遺産なので、法隆寺などと一緒です。文化遺産は文化庁が所管しておりますから、文化財保護法を適用させるということが基準です。ちなみに自然遺産というもう一つのカテゴリーがあるのですが、それは環境省がやっています。いろいろな法律の適用を受けます。

「紀伊山地の霊場と参詣道」というのが世界遺産の名前です。「霊場」というのは寺社、「参詣道」というのは熊野古道のような道ですが、それに関して「文化的景観」というキーワードがあります。これは人が自然を利用して作り出

した景観ということで解釈されていますが、もともと世界遺産自体はユネスコが世界のいい自然、いい文化を守っていこうということで始めたものですので、守るカテゴリーの一つに文化的景観を入れています。紀伊山地の霊場の場合は、霊的な風景といったものを含めて言っていると解釈されています。

### 三つのコンセプトと四つの方針

ワークショップをしたり、あるいは専門家の方とヒアリングをした結果、三つのコンセプトが出てきました。「独自性の確立」というのは、道の世界遺産、巡礼の道ということで日本の精神文化が行き来しておりますので、そういった独自のものを大事にしようということが一つです。それから、自然環境あるいは生活環境も含めて非常にいいところにありますので、そういった意味での「環境保全」。逆に、「内発的な地域振興」、つまり外からいろいろなエネルギーを持ってやるのではなくて、内部から発するという形での地域振興をしていこうと。これを三つの基本と言っております。総合的な環境保全と地域振興が相関する関係がエコツーリズムだと思いますが、そこに世界遺産の独自性を基本として進めるといことです。

四つの方針も大事なものです。「自主的に行動する」、人のことを非難、批評するのではなく、自分でやろうと。「多くの仲間と協働」しよう。それから「じっくりと取り組もう」、これは地元の方に教えていただいたのですが、行政のペースではなくて、自分たちのペースでやりたいということです。それから「あるものを活用する」。今は新しいものを作る余裕はありませんので、既存のものをいろいろ工夫しながら使っていこうという意味です。そうしながら熊野古道の目指すべき姿を作ろうということで考えております。

具体的には、「現代の巡礼道」ということで、いろいろなものを取りそろえて 熊野古道に関する住民理解の普及、 古道ルネッサンス、

平成の熊野参詣道、 平成の善根宿、宿坊の設置、 バリアフリー古道といった具体的なメニューが入っております。例えば、宿を作るのでも、民家を改装していい宿を作ろうとか、今はどんどん街道の風情がなくなっていますので、街道の風情を残しながらもう一度ゆっくり歩いていただけるような道を守っていこうというようなことです。

「熊野古道ツーリズム」という名前をつけましたが、これがエコツーリズムのことです。自分たちで歩くルールをきちんと作ろうとか、あ



るいはレンジャーを置こうとか、駐車場対策をどうしようということも入っております。

拠点施設として、実はパブルがはじけるころに用意したお金が今たまっておりますので、ここだけは新しいものを作ろうということで、熊野古道センター（仮称）と言っております。これについても形からではなくて、中身から入ろうという動きがあります。

あと、記念イベントをどうしようかというのがあります。ワークショップをやっているときにだんだんわかってきたのですが、今はイベント、フェスティバルなどに対する興味は、一般の方にはほとんどないのです。これは私には不思議でした。ただ、記念事業をしようということとは考えています。

「協働」という運営形態でやっていく

協働で運営していく協働会議ということで、「熊野古道協働会議（仮称）」が中心になってやっていこう、それにはすべての人にかかわっていただくと考えています。構成員は関係する人全部です。運営形態としては総会をやったり委員会をやったりしますが、迅速な意思決定をしたいときがありますので、委員を置こうということで一応9月をめどに開こうと思っています。

お配りした冊子の中にも書いてありますが、関係者団体名簿に一般の住民の方も載せています。1回でも来ていただいた方は載っています。属性については、やはり多いのは保存会の方で、自分たちが峠を保存しているという気持ちがあって、掘り返して今も守っていらっしゃる方。そこを案内される語り部の方、それから、まちづくりの若者グループが入ってくれました。これが約60名です。あとは仕事に絡んで、国土交通省や管内の市町村の職員方に入りました。もちろん県の職員も入っております。

ユニークなのは事務局だと思います。事務局は普通は県の職員だけですが、前田憲司さんと山本さんが入っています。前田憲司さんは今はフリーライターということで文筆をやっていらっしゃいます。山本さんはお仕事は別にしていらっしゃいますが、立場としては市民団体の代表として入りました。このお2人に、ほかの職員と同じような立場に入りました。だから行政だけの変な下打ち合わせなどは全くなかったです。やるのであれば5人集まってからということでやりました。そのような経験を去年8月から今年の3月までやらせていただきました。

「まち興しには「よそ者」「若者」「バカ者」



（山本） 本職は造船関係の部品を造っております。

阪神のときには学生で、10日間だけ避難所の支援に行きました。ナホトカ号の重油流出事故があったときはフリーターをしております、バイトを辞めて2か月半ぐらい三国のボランティア本部で活動しました。それから防災のことを少しずつやるようになってはいたのですが、1998年に県職員の平野さんから「イベントをやるから手伝ってくれないか」と突然会社に電話がありました。両親が大阪出身なので、なかなか地元で根ざした生活感を自分が持っていないということにコンプレックスもありまして、地元の人から声をかけてもらったのだからぜひ手伝おうと思ったのです。

そういうきっかけでいろいろとボランティアの活動をさせていただくようになって、「ハローボランティア・ネットワークみえ」というイベント支援のボランティアをやっておりました。

この熊野古道の件も、平野さんからお話があったのですが、この話を受けたときは私自身もどうかかわり方ができるのかなと悩んだのです。アクションプログラムを作るということがどういう意味を持っているのかもよくわからないまま参加しましたので、何ができるかとずっと悩みながら、好奇心はあるので、やれることはやってみようということが一つ。それから熊野古道の地域が魅力的だったのです。東紀州地域と呼ばれているところだけでも、車で端から端まで3時間以上かかる土地に10万人しか住んでいないのです。そこが東海・東南海地震で非常に危険な地域だと。防災の活動はしておりましたので、何とか接点を持ちたいと

思ったのですが、東紀州で活動している方とずっと知り合いになれる、自分にメリットがあるなど参加させていただきました。

事務局の会議から参加してほしいという話で参加させていただいて、行政がこういうプログラムをどうやって作るのかということを非常に勉強させていただきました。

その中で自分がどういう力を発揮できるのかと悶々としてはいたのですが、偶然このアクションプログラム作りに参加する直前ぐらいに、ワークショップのやり方を少し勉強したところだったので、ぜひワークショップでやりましょうと。市民に意見を聞くだけではなくて、市民に決めさせようと。最近ワークショップという名前をつければいいと思っている行政の方がたくさんみえて、ただ意見を聞くだけのワークショップがよくあるのですが、参加した以上はきちんと自分たちで結論を出せるような場作りが私はワークショップだと思っています。それが私にできる一つの行為だったかなと思っています。

もう一つ私自身が過去の経験が今回生かされたと思うのは、ワークショップのファシリテート（進行）です。自己紹介で言ったように、阪神や三国で活動していると、今日来たボランティアの人たちと1日のうちに成果を出さないといけない。今日来た人たちと夕方までには一定の成果を出すということを毎日2か月半ぐらい三国で取り組んでいたせいで、名前を知らなくても一緒に仕事ができるという妙な特技を持ってしまいました。それを今回のワークショップでファシリテートするうえで非常に生かされたかなと思っています。

ワークショップをやるときは目的をきっちり決めてやるというのは当然ですが、目的から外れた話題になったときに、いかにそれを止められるかというのが大きなコツになります。私の場合、「それは目的外だから」とすぐ切ってしまうのです。かなり反感は食らいますが、そうしないと成果が出せないのです。恐らく地元の人では難しかったと思うのです。町を興すのに「よそ者」、「若者」、「バカ者」が要るというのをよく聞きますが、その意味でよそ者の役割を今回果たせたのかなと思っています。

そういうワークショップをよそ者の仕切りで成果をきちんと出せたと自分で評価はしております。おかげさまで去年参加してくれたメンバーが今年も引き続き四つのアクションにどんどん参加してくれているのでありがたいと思っております。



（前田）私は仕事をころころ変えてきている人間で、学校を出てからすぐコンピュータのビジネスソフトのSEを十数年間しておりました。まだパソコンが普及する前に、流通系のビジネスソフトをCOBOLなどの言語で組んでいた時代で、20代から何億円という規模のプロジェクトを動かしておりました。すかいらーくさんのレジ、販売管理、人事・財務のシステムのプロジェクトリーダーをさせていただいた経験もあります。

実は小さなころから祭りと落語が大好きという人間で、そういうことを趣味でやりながら、いろいろなところでものを書いたり、事典の執筆をしたりしておりました。自分では、そういうことを生かしながら仕事ができないかと思っておりました。

伊勢内宮前に「おかげ横町」というところがありまして、非常に閑散としていたところが地域興して復興したということで脚光を浴びているところなのです。ハードはできたけれども、ソフトがなかなか充実しないということで、向こうのオーナーさんにご縁があって、祭りや落語の知識をもって日本的な催しに取り組もうと、理系的な仕事から文系的な仕事へと転職したのが阪神・淡路大震災の年でした。地震の影響で伊勢志摩エリアへのお客さんが一気に冷え込んだときでもありました。

そこで責任者として、本当に自分のやり方で催しをさせていただいて、その中で行政と色々な形で協働的にやる催しもありまして、言いたいことは言わせていただきながらやっておりました。平野さんとは歴史街道フェスタという催しで何か一緒にできないだろうかということとさせていただいたのがお付き合いの始

まりでした。

5年間そこで仕事をしていたのですが、事情があってフリーでいたときに、また彼から電話をいただいて、今度は熊野古道のアクションプログラムを作るということがかかわらせていただいたのです。フリーになってから地域史の編集や企画、執筆を中心に仕事をさせていただいて、その活動を見て彼に声をかけていただいたのです。

#### SE時代の経験がワークショップで生きた

思ってもいなかったのですが、ワークショップに入ってやらせていただいたときに、過去にやっていたコンピュータのSE時代の、いろいろ情報分析をしたり、曖昧模糊としているものを一つの形にまとめていたり、さまざま勝手な意見が出てくるものをある一定の方向に解決策を見いだしながら分類整理をしていく、そちらの経験が生きました。例えばポストイットに書かれた問題も、とにかく皆さんの意見全部に目を通して、自分で入力をして、自分で整理しました。しかも書くという行為まで加わると、自分の頭の中に全部入ってきます。それは非常に大切なことだと思いながら情報整理をさせていただきました。

それと、思わぬ形で今回のアクションプログラムを面白がっていただけました。サラリーマン生活もしている、フリーでいろいろなことをさせていただいている、そんな私の市民感覚で、行政の仕組みや仕掛けに対する本当に純朴な疑問などをフリーディスカッションながらポンポンとしゃべる。行政というのは1年間の予算が必ず入ってくるので計画が組めて、それをいかに使うかですが、民間の営業活動においては入ってくるかどうかもわからないわけですから、決めてあってもなかなかそういう形にはうまくいかないという部分があります。しかし、それでもきちっとやらなければいけないというところの差で、管理する、されるという部分での話のことなど、いろいろなことがありましたが、結果としてはそれがよかったのではないかと考えています。

「古野古道アクションプログラム」を作るに当たっても、まず本編と分冊に分けたのです。コスト的にも1冊のほうが安いのでしょうか、分けた理由は、計画を作ることだけが目的になってしまって実行が伴わないのを避けるためです。これを分けることによって年度編は来年も作り替えなければいけないという仕組みを取ったわけです。評価をして改訂せざるを得ないわけです。

この「せざるを得ない仕組み」というのは、ビジネスソフトを設計しているときによくそういう場面がありました。例えば、すかいらくさんのオーダーエントリーという、レストランで注文を取るシステムを初めて入れるときに私もかかわったのですが、多店舗展開する中でレジにアルバイトをたくさん登用するようになると、アルバイトは地域の人から取り出すので、顔見知りがあるとレジで1品だけ入力しなかったりということをするわけです。しかし、あの機械を入れることによってキッチンまでつながり、そのデータがそのままレジにつながるとなれば不正のしようがなくなるわけです。一つのことでもキッチンもレジも両方OKになるという、自然にそういう流れができてしまう仕掛けをコンピュータ時代にいろいろ作っていました。

そういう仕掛けの中で平野さんと話し合いながら、来年この計画が生きていくためには分けておくべきでしょうという話をさせていただきました。

実際にワークショップをやりながら感じたことで、世界遺産ということで非常に上滑りした面もあって、例えばイベントの話で、当初の段階では少子高齢化をテーマにした話題の中で「熊野古道を使ったお見合いツアーをやらう」というような、どこが世界遺産なのかと思うような意見まで出てくるわけです。まじめな方は非常にまじめに取り組んでいらっしゃるけれども、どこが具体的に遺産に指定されるのかという話は全然わかっていないわけです。教育委員会マターでいろいろなことはされているのだけれども、正確な情報は伝わっていないので、ぜひ地図だけは入れてほしいと言いました。実は正確な地図が公開されているのはこの資料だけなので、本当に活動したい人はこの本を欲しがらるだろうと。広く市民の方に使ってもらえる資料としてこのようなことも入れましたが、興味のない方には全く無駄です。

実はこれを出すのに教育委員会の方が非常に抵抗されました。理由ははっきりしているのです。まだ不確定な情報だからということだけだったのですが、ぜひ出してほしいとお願いして折衷案という形でさせていただきました。そういう感覚を平野さんに評価していただいて、こういう取り組みをさせていただいたところでした。

(文責 細川)

## 目 次 - 第16号 -

会員リレーエッセイ 「スカパー熱乱高下譚」	高島 正典	..... 1
第18回話題提供ダイジェスト		
「三宅村復興計画～計画の策定とその後の展開～」	池田・佐久間	..... 2
「熊野古道アクションプログラムの作り方」	平野・山本・前田	..... 7
事務局からのお知らせなど		.....12

### 事務局からのお知らせ

平成15年度第3回は、10月31日、人と防災未来センターでの開催です。今回は阪神・淡路大震災を振り返る会です。震災当時コープ神戸の副理事長だった増田大成さんと、当時神戸新聞に居らした山口一史さんにお話しいただきます。私にとっては被災者復興支援会議を通して知り合いになれたことを宝とされているお二人です。ホットな増田さん、クールな山口さん、お二人に共通しているのは市民の力による震災復興への想いの強さだと思っています。この日のもう一つの魅力は研究会終了後の飲み会を「洒苑」というJR灘駅前にある焼き肉屋で開くことです。他では食べられないような特別な肉をご用意させていただきます。ご期待ください。

第4回は平成16年1月30日午後、例年の通り神戸震災技術展の会場をお借りしてオー

ンフォーラムとして開催致します。当日のテーマは「日本社会に適した危機管理」です。本年度から始まった文部科学省科学技術振興調整費の研究プロジェクトの一環として、日本の社会風土に適しつつ、しかもどのような種類の危機が発生しても一元的に対応できる危機管理システムを作ることは可能かどうかについて、議論をしてみたいと思います。基調講演として「日本社会に適した危機管理の必要性」と題して私がきっかけを作らせていただきます。引き続き、「日本社会に適した危機管理のすがた」と題して、「情報」「組織」「対応施策」をキーワードとしてパネルディスカッションを行いたいと思います。もちろんこれも例年の通り、前日29日からの比較防災学ワークショップに引き続いての開催です。こちらにも是非おいでください。(林春男)

### いんぷおめーしょん

「CARDによるカリフォルニア州危機管理システム研究会」

講師：アナマリー・ジョーンズ氏  
(NPO法人CARD代表)

#### 東京講演

と き：平成15年11月18日(火)

13:00～18:00

ところ：北区防災センター 大会議室

(東京都北区西ヶ原2-1-6)

テーマ：Self Home Preparedness

(家庭における災害への備え)

通訳がきます

問合せ先：TEL03-3682-1090 (SBK/青野)

#### 神戸講演

と き：平成15年11月20日(木)

14:30～16:00

ところ：防災科学技術研究所 地震防災フロンティア研究センター 大会議室

(神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2ひと未来館4階)

テーマ：Agency Emergency Plan

(組織の防災計画)

と き：平成15年11月21日(金)

9:00～12:00

ところ：人と防災未来センター プレゼンテーションルーム

(神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2防災未来館5階)

テーマ：SEMS

(カリフォルニア州標準危機管理システム)

問合せ先：TEL078-262-5528 (EDM/牧)

### 災害対応研究会

事務局：京都大学防災研究所巨大災害研究センター  
〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄  
TEL 0774-38-4280 FAX 0774-31-8294

ニュースレターに関するお問い合わせ：  
細川顕司 TEL 03-3473-0119  
青野文江 TEL 03-3682-1090